

## 総合俳句論

### 第四章 判断基準の主体性

#### 1 俳句と川柳

霜柱俳句は切字響きけり

石田波郷

葉桜の中の無数の空さわぐ

篠原 梵

波郷の句には「切れ字」があつて、梵の句には「切れ」もない。「切れ」のない句は俳句ではないとする考えがあるが、そうであれば、梵の葉桜の句は俳句ではない。詩を読むときに内容を讀まずに先ず形式を問題にするのは、特殊な読みで、どうであろうか。草田男は、破調のことで、「内容にそくしてそれを考えてみよう」としない人が多い。成程、詰屈だが、にも拘らず内容がこれ程生きているということと言う人は殆どないのです。」と嘆いた。「切れ」の場合も先ず「切れ」よりも「内容にそくして」読む必要がある。内容を讀めば、「葉桜」と「無数の空」との対比がいい。五七五とは違った斬新なリズムもいい。5・3・4・2・3（葉桜の・中の・無数の・空・さわぐ）のリズムで、下五の2・3（空・さわぐ）に梵独自の良さがある。波郷の「霜柱」と梵の「葉桜」とを比べると明らかに「葉桜」の句の質が高い。俳句の様式を超えて質の高さがある。形式や様式を過度に重視すると、質の低下という問題が起きてくる。これが最近の俳句の最大の課題であろうと思う。

俳句は、五・七・五の「十七音」と季題、季語、季感などの「季」、それに「切れ」をその形式の特徴としているが、この三つについては、様々な見解があつて、「俳句とは何か」を論じるのは、簡単なものではない。これが論争に発展すれば、不毛な結果を生み、俳句そのものを衰退させるのである。俳壇は、「有季定型」を主たる問題とし、現代俳句協会と俳人協会と伝統俳句協会に分裂した。成る程、俳句ブームなどといって、俳句の数は、異常なほどに増加したが、俳句の質は、低下しているのではないか。協会分裂は、「有季定型」をめぐる、異質のものを排除したことによる結果とみてよい。異なるものの排除によって、活力を無くしたのである。これを克服するには、俳句が多様性の方向に進むしかない。「多様な俳句への新たな展開を」である。

「切れ」のない句は俳句としては評価されないという考えが俳句の世界での主流である。復本一郎の『俳句と川柳』では、「切れ字」よりも「切れ」ということで、「切れ」をもって、俳句が俳句であることの根拠とした。この書の結論

は、

唯一の俳句の砦として残るのは、「切れ」しかないのである。

とし、俳句と川柳との違いを「切れ」の有無に見た。「切れ」のない俳句はない、ということである。「切れ」の有無の判断は、難しい。高度の専門的な知識が必要で、また、主観的な判断によるところがある。

俳句の「切れ」を形式や様式の面で明らかにするのは、難しい。俳句や川柳は、庶民の文芸であって、そのことを忘れてはならない。形式や様式では、他愛の無い俗なところがある、と見たほうがいい。そして、作者のころは、高きところにも低きところにも置くことが出来る。これがいいのである。芭蕉の

高くこころをさととりて俗に帰るべし

という境地を表現することが可能である。

俳句　　メーデーや家の柱の垂直に

高橋信之

川柳　　客となる背なの柱の垂直に

高橋信之

「メーデー」の句は、作者の心境を読みとる事が重要であって、「客となる」の句は、作者の私があらわれているか、が重要であるが、「俳句とは何か」、「川柳とは何か」という問題にきっぱりとした結論を出さないほうがいい。作者の一人一人がきっぱりとした考えを持って俳句や川柳を作ればよいので、結論は、早急に出さないほうがいい。これは、作者の一人一人の問題として重要で、作者個々の心境の問題となる。心の在り様であり、心の姿が問題となる。あるものに接したり、あることを見たときの心の姿であって、心そのものではない。川柳は、作者の私をあらわす詩だが、俳句は、作者の心の姿があらわれる詩である。そして、自然を見ていると作者の心の姿がありありとあらわれてくる。自然は、作者の心の在り様によつて、深くひろびろとしたものとなる。川柳は、他人を笑って、私から逃れることがあるが、俳句は、自然界を実生活の私からの逃避場とすることがある。「俳句と川柳」の違いをきっぱりと提示する必要は無い。作者それぞれが自分なりにきっぱりとした考えがあればよい。そうであれば、異なるものを排除するといったところがなくなり、異質なものとの交流が可能で、そのエネルギーがそれぞれを活性化し、質の向上ともなるに違いない。

「柳俳一如」、「俳柳一如」という考えがあるが、やはり、俳句は俳句であり、

川柳は川柳である、と考えたほうがよい。俳句と川柳との違いについて多くの人々の合意を取り付ける必要はない。それぞれがそれぞれの考えを持っておればよいのであって、子規が言うように、

俳句にして川柳に近きは、俳句の拙なる者。若し之を川柳とし見れば、更に拙なり。川柳にして俳句に近きは、川柳の拙なる者。若し之を俳句とし見れば、更に拙なり。

である。俳句と川柳は、お互いに「異」なるものであって、その間には、距離がある。この「異」なるものは、私の論考での主たるテーマではない。異との「関わり」が問題なのであって、その関わりによってお互いの存在がより明らかになる。お互いがお互いの存在を際立たせてくれるのである。以下に挙げる句は、俳句作家と川柳作家の作品だが、俳句と川柳を並べるだけでも、そのことよって、俳句は、俳句としてより際立ってくる。川柳は、川柳としてより際立ってくる。俳句と川柳との間にいい緊張感があつて、新しい力が働いている。そこには、「異」なるものの争いや戦いが無い。これは、「多様な俳句への新たな展開を」の一例である。

竹落葉わが胸中を降ることし

高橋正子

私のふかいところで飛ぶカモメ

川瀬晶子

## 2 俳句と現代詩

唐太の天ぞ垂れたり鯨群来

山口誓子

てふてふが一匹韃靼海峡を渡っていった

安西冬衛

安西冬衛の「てふてふ」の詩は、小学校の国語教科書に載っているの、多くの人に知られているが、それとは別の理由で、私にとっての身近な詩として、愛誦していた。この詩は、中国大陸の大連で作られたもので、そこで、私も少年時代を過ごした。

大連で育った清岡卓行の著書「アカシアの大連」では、「この詩の発想も、大連という都会を地盤とすることなしにはありえないはずであった。そこでは、北方の韃靼海峡(間宮海峡)という地理的な国際性の荒々しい危難が舞台となっている。そしてその激浪あるいは風の上を、若々しく可憐な生命を象徴する一匹の蝶が、大胆にも軽々と渡って行く」とあって、この詩は、大連で育った者

に特別な思いを抱かせる。

明珍昇著「評伝安西冬衛」（櫻楓社刊）によれば、大連で編集発行した同人詩誌「亜」十九号にこの詩が載っていて、前書きに「軍艦北門の砲塔にて」とあり、軍港旅順、あるいは大連に停泊中の軍艦の砲塔で飛び立つ蝶を見て詠んだのであるう、とする。だから「方向はどちらでもよいということになるう。韃靼のわだつみの上を健気にも飛ぶ蝶をイメージできればいいのである。」と書く。寺井谷子の「四季を見る」（梅里書房刊）では、渡つていったのは、「どちらからでも構わないですよ」と安西冬衛自身が言われたとのことである。同じころの作で「韃靼のわだつみ渡る蝶々かな」がある。

安西冬衛は、俳人の山口誓子を畏敬したという。山口誓子は、少年時代の五年間を樺太日日新聞社社長の外祖父の許で育った。樺太（唐太）は、安西冬衛の大連と同じで当時日本の領土で、それ以前は、ロシアの領土であった。そのどちらにも、ロシア人の建てた建物があった。誓子の現代俳句と冬衛の現代詩には、日本近代の同じ姿が確かにあるが、俳句と現代詩の違いは、どうであろうか。

安西冬衛の現代詩「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つていった」での「渡つていった」は、渡って行く方向がどちらでもよいのであって、その詩的なイメージが重視される。一方、俳句の場合の多くは、その言葉の意味が明らかで、「どこへ」という場所、そして作者の位置、姿が読者に見えてくる。一句全体の景が明らかである。

唐太の天ぞ垂れたり鯨群来

山口誓子

この句の「群来」は、鯨が群れて来るのが「どちらでもよい」のではなく、読者にも見えてくる。「群来」は、三省堂大辞林、ネット検索でも分かるが、「くき」と読み、「産卵期のニシンが大群で北海道西岸に回遊してくること」とある。産卵のために樺太西岸、石狩湾に押し寄せてくる。「唐太の天ぞ垂れたり」とあれば、作者の位置がいつそう明らかである。

詩人の清岡卓行は、安西冬衛の「てふてふ」に「若々しく可憐な生命を象徴する一匹の蝶」を見た。渡って行くのは、どちらでもいい。山口誓子の「鯨群来」には、北の海の力強い産卵風景が見えてくる。産卵のためであれば、鯨の群れて来る方向は明らかである。

「鯨群来」を力強く読者に訴える技法に切れ字がある。下五の「鯨群来」の前の切れが力強い。「唐太の天ぞ垂れたり」と「鯨群来」が切れていて、その対比にある力強さがこの句の良さで、生活者の強さを表現した。安西冬衛の「てふてふが一匹韃靼海峡を渡つていった」には、切れがない。そのことがこの詩

を俳句から遠ざけて、「てふてふ」の季節も明らかでない。俳句では、「蝶」の季は、春であるが、冬衛の「てふてふ」が春であることは、この詩に相応しくない。詩情が壊れてしまうのである。

俳句と現代詩との間には、歴然とした違いがあるが、その違いの垣根を出来れば低いものにしたい。俳句は、もつと現代詩に近づいた方がよい。俳句は、もつと欧米の詩に近づいた方がよい。俳句は、詩ではない、という論があるが、日本の詩には俳句や現代詩などがあつて、私は、俳句を作っている。俳句は、間違いなく詩であると思っている。

俳句と現代詩との間の垣根が最も低いと思われるのは、詩人三好達治の作品であろう。

(俳句) 柿うるる夜は夜もすがら水車 三好達治

(現代詩) 雪 三好達治

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

(三好達治『測量船』昭和五年)

詩人三好達治の「柿うるる」の俳句は、東大仏文科時代の作で辰野隆教授に絶賛された。作句は、小学生の時からで、京都の三高時代には、一千句を作ったという。『俳句鑑賞』などがある。

山口誓子、安西冬衛、三好達治の作品を取り上げたが、どれもが第一作品集であつて、山口誓子句集『凍港』(昭和七年)、安西冬衛詩集『軍艦茉莉』(昭和四年)、三好達治詩集『測量船』(昭和五年)などである。詩人の第一集となつた作品集は、どれもが初々しくて詩人の眼がきらきら光っている。内面から溢れ出る初心の純粹な詩情は、世間の枠から食みだそうとする勢いがある。中村草田男の第一句集『長子』(昭和十年)もその例外ではなく、私の愛誦句集である。

冬の水一枝の影も欺かず 中村草田男

斎藤茂吉の第一歌集『赤光』(大正二年)も私の愛誦歌集となつた。

めん鶏ら砂浴び居たりひっそりと

剃刀研人は過ぎ行きにけり

星のゐる夜ぞらのもとに赤赤と

ははそはの母は燃えゆきにけり

(斎藤茂吉『赤光』より二首)

私の論考のテーマは、「多様な俳句」で、今回は、「俳句と現代詩」を取り上げたが、私が言う「多様性」は、「雑多な多様性」ではなく、「調和ある多様性」で、それも意図のある「調和」であってはならない。日本の「和の精神」は、どこか如何わしいところがある。権力者の大衆支配の下心が見えてくる。もつと自然なものであつて欲しい。「調和ある多様性」は、人間らしい本来の「多様性」であつて、そこには、生命の輝きがある。詩人それぞれの第一作品集には、それらに共通する「生命の輝き」があつて、多様な展開を見せてくれる。俳句であれ、川柳であれ、短歌であれ、現代詩であれ、「生命の輝き」があれば、それぞれが多様な展開を見せてくれる。俳句が他のジャンルとの良き交流があれば、そこから活力を得て、新たな展開を見せてくれる。グローバルな時代には、異なる世界との良き交流が望まれ、生き生きとした人間社会の構築が期待される。

### 3 俳句の判断基準

閑さや岩にしみいる蟬の声

芭蕉

俗を離れた静寂の境地。これほど物の本源深くを詠んだ句は芭蕉以前にも以後にもないであろう。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

芭蕉最後の吟として知られるが、死に臨んで悟り澄ました境地でなく、人間らしい感情がなまなましく伝わってくる。旅のこころは、一所不住である。詩人のこころもまた、一つとところにとどまらずに、新しい生命を求めて心の旅を続ける。

左記の鑑賞は、私の「俳句の判断基準」によるものだが、この「俳句の判断基準」には、私の「主体性」の有る無しが重要となる。俳句の約束事に、季語と十七字音があるが、季語と十七字音は、私の「俳句の判断基準」ではない。俳句を読む、俳句の選をする、という行為は、その句の作者と同じ心境になら

なければ、難しい。その句の本当の理解ができないということである。同じ心境になるには、作者の置かれた環境と同じものを想定し、そこに、読み手は身を置かなければならないので、それなりの努力が要る。それなりの時間も掛かる。俳句での意味内容は、理屈なので、俳句では、句の姿、つまり作者の心境を読み取ることが重要であり、心境というものは、その人の心境と同じレベルに達していなければ、理解できない。俳句の評価を間違いなすするためには、俳句の仲間が二十名以内が妥当かと思う。俳句大会での何万という句の選は、考えられない。

日本人の「判断基準」の多くには、右に習え、ということがある。ある精神科の医師の話によれば、フランスの鬱病患者は、自分には、他の人々と違ったところがない、ということと病となるが、日本の鬱病患者は、自分が他の人々と同じでない、ということと病となる。日本では、右に習え、ということができなければ、鬱病となる。この論考での「俳句の判断基準」は、私が俳句の選をするに当たっての私自身の「判断基準」であって、マスメディアで活躍する著名な俳人たちの「判断基準」ではない。私の「右に習え」ではない。グローバル化の時代となった世界では、日本の「右に習え」が通用しないであろう。「多様性」といい、「主体性」といったことが問題なのである。

二〇〇一年のユネスコ総会では「文化の多様性」を尊重する宣言が採択された。この「多様性」こそが人類の共有財産であることがうたわれた。「俳誌水煙」第三号（一九八三年十二月号）では、川本臥風の指摘として、「文化において大切な事は画一性ではなくて、多様性である。」ことを取り上げた。グローバル化の時代が「多様性」を無視できないのは、必然のことであろうとも思われ、一九九二年五月には、「生物多様性条約」もつくられた。生物多様性は人類の生存を支え、人類に様々な恵みをもたらすもので、生物に国境はなく、世界全体でこの問題に取り組むことが重要なのである。

文化において大切なことが画一性ではなく、多様性であるならば、その根底にある「主体性」が重要となり、特に俳句では、獨創性というよりも、主体性が問題となる。俳句での「主体性」が問題となるのは、その理由の一つに、俳句が伝統文化であり、伝統文化と関わる個人に主体性がなければ、「伝統」というものに振り回され、俳句は、文学でもなく、文化でもないものとなる。

左記の句を選択し、鑑賞をするが、これも私の「俳句の判断基準」によるもので、これは、私の「主体性」が成す選択である。

鶏頭の十四五本もありぬべし 子規

この句の評価は、まちまちであるが、子規の写生論を取りあげるときには、

必ずといってよいほど問題になる句である。この句は、歌人斎藤茂吉によって、子規晩年の代表作の一つとして賞揚されたが、高浜虚子は、子規の佳句と認めることはなく、終生黙殺したのである。虚子や碧梧桐のような俳人がこれを認めず、節や茂吉のような歌人がこれを賞讃した。

冬の水一枝の影も欺かず 草田男

中村草田男は、芭蕉に近い心境にあつて、一つなる真実を求めた。昭和十一年刊の第一句集『長子』に収録されている。「一枝の影も欺かず」というのは、「冬の水」であつて、草田男が見た「冬の水」は、その皮相なるものではなく、その実相であり、移ろい行くものの中にあつて、変わらぬもの、その本質である。「冬の水」に「虚」と「実」とが「一つ」になつた世界を見て、「一つ」なる「ほんとうのこと」を責め悟るのである。「冬の水」は、写生でもなく、虚構でもない。真実である。これが芭蕉のいう「風雅の誠」であつて、一つなる真実を求めた草田男の心境に打たれる。

草田男第一句集『長子』についての歌人斎藤茂吉の評が勝れている。此等の句には、『写生』のうちに、『思想』があり、その『思想』も『生』に根ざして清新で、もはや平安朝文学や、唐宋詩人の余唾ではなくなつてゐる。ここにおのづから中村氏の人物が出てゐるのではなからうか。

この文は、旧制松山高校俳句会の「星丘」中村草田男句集『長子』刊行記念号（発行人川本臥風、昭和十二年六月発行）に載つた。

われに傾ぐ大きな蓮の葉の無疵 臥風

動きが静かで、存在の大きな句である。すべてを包み込んで安らぎを与えてくれる。

私は、一九八三年に俳誌水煙を創刊し、二〇〇九年には代表が妻の正子となつて、誌名を「花冠」に変えた。私の俳句仲間は、多くはないが、確実に育っている。私たちの俳句は、「明るくて深いもの」を目指しているが、この選択は、「主体性」のある選択であつた。以下は、私達の俳句仲間の句で、その鑑賞は、私の「俳句の判断基準」である。

水に触れ水に映りて蜻蛉飛ぶ 正子

（草田男の「冬の水一枝の影も欺かず」と似た心境のある。作者の視点、心の在りどころが一点に集中された。一点の曇りもなく、情景がありあ



りと読み手に眼前に浮かぶ。)

湯のはじく乳房の張りよ夕月夜 洋子

(「夕月夜」であれば、美しい彫像のようだ。俳句が詩であれば、美しい世界を詠む。)

蒲公英の数本は吾が影へあり 恵子

(蒲公英を身近に引き寄せて一つの世界を作った。作者の優しさである。)  
ふり仰ぐ天の深さよ春の雪 文彦

(春の雪が降っている、唯それだけの世界であり、そこに深さと明るさがある。)

蒲公英の種ふと浮び空の詩 啓一

(一瞬の美しさがいい。一瞬が詩の言葉となって、この世に留まった。)  
雪すべて降らせて戻る空の青 琴

(時間と空間を捉えて大きな世界を創造した。作者の内面が大きいのである。)

水のいろ火のいろ街に秋燈 ますみ

(都会の季節を詠んで、言葉が新鮮である。)  
菜の花の黄の集まりて空に浮く 句美子

(春先の風景が明るく、みずみずしい。それは、作者の内なる風景でもある。)

私達が目指している「明るくて深いもの」は、社会学者の見田宗介氏の指摘によれば、これまでの思想や文学には、なかったという。その後の二十年も同じ状況が続いているので、この課題を選択することは、主体性のある選択なのである。

これまでの日本の文学は少し暗すぎるので、もっと明るくなった方がよい。もちろん赤ん坊や幼児の深みのない明るさではなく、長い修練を経てはじめて身に付いた「深みのある明るさ」である。私の俳句は、「明るくて深いもの」を目指し、先ずは、のびのびと、いきいきとしたものでありたいと願っている。そのことによる多少の破調も恐れてはいない。

芽吹く樹へつきつき心遊ばせる 昭和五十一年作

(空海の「遊心大空」である。心をひろびろとした大空に向け、世俗的なところから抜け出るよう、諭された。)

メーデーや家の柱の垂直に 昭和五十一年作

(家の柱が垂直なのは、当たり前だが、鴨居は水平、柱は垂直、ということとで、「当たり前」のことへの驚き、その大切さへの思いが句となった。

「メーデー」には、政治的な思いはなく、社会的な「季感」がある。

秋雲つぎつぎ寺の庇より離れ 昭和五十二年作

（破調の句にも愛着があつて、私の代表句である。角川書店の「名句鑑賞辞典」に取り上げられ、俳人協会副会長の宮津昭彦氏による「視覚のびのび働いている句で、八・八・三の破調も作者の感興をいきいきと伝えている。」との鑑賞文をいただいた。）

秋天を一つ誰もが頭上にもてり 昭和五十四年作

（「高くころろをさととりて俗に帰るべし」という芭蕉の言葉が常に私の念頭にある。これは、衆生を救う菩薩の心で、「平等」についても考えさせられる。私の言う「平等」は、「生きとし生けるもの」との平等で、それらとの「対等」といった、自由で、開放的なものである。）

死んでまた死んで墓石が春風に 平成二十二年作

（ごく最近の句である。死もまた明るく、墓石もまた明るいものとしたい。）  
グローバル化の時代にあつて、ITに多くを頼っている社会にあつて、人か、システムか、という問題が持ち上がっているが、文化は、あくまでも人であつて、個人が問題なのである。

カーライルは、「世界の富とは、世界の持つ独創的な人間を指しているものであつて、その存在、活動によって初めて世界は世界であり混沌でなくなつて来る。」と、こんなこと言っているが、グローバル化の時代に「多様性」が問題となり、その「多様性」には、それぞれの「主体性」が問われている。私の「俳句の判断基準」もまた「主体性」が問われている。